

白波の立田山

土田龍太郎

一、

伊勢物語二十三段に載する井筒の歌と白波の立田山の歌、昔より世の人のめづることよなし。これらの歌詠めりし男と女の仲らひ、草子地にはあらあら左のごとくに説きなしたり。

昔田舎わたらひして世を過すものを親とせると男と乙女、いとけなきほどより遊びがたきなりたれども大人になりゆくころ筒井つの井筒の歌など詠み交してなれまさるままにつひに本意のごとく妹背の契りを結びけり。この男の詠めりし名にしおふ井筒の歌と女のかへし知らぬ人まれなるめればここに引かでもありなむ。かくて年月経るほどになりはひあしくなりぬれば、男いつしか河内國高安の郡に行きかよひかしこに住める女とねもころになりけれど、もとの女悪しと思へるけしきもなくて夫を出だしやりければ、男はもしや妻に異心ありやに思ひ疑ひて、ある日河内にも行かで前栽の中に隠れあたるに、女うちながめて

風吹けば沖つ白波立田山

夜半には君がひとりこゆらむ

と口ずさみければ、男聞きてあはれにたへぎりしにてもやありけむ、この歌をめづるにまかせて河内の女とはやがてうとくなりにけりとぞ。一段の末に河内の女の歌二首載りたれど、そは省くとも苦しかるまじ。

白波の立田山の歌、大和物語にも見ゆれどその草子地に説くこと右に記せし伊勢物語の嘶にさまで異ならず。男と女の住めりしところいづくなりしや、伊勢物語はなにと云はず、葛城の郡なること大和物語によりてぞすなはち知るをうべき。かへりて井筒の歌とそ
の草子地、大和物語にはふつに缺けたり。そも中昔の歌集と假名物語のたぐひにこの井

筒の歌を収むるものとしては伊勢物語のほかさらになきはややいぶかしと思はでやはあらむ。

白波の立田山の歌を古き文どもに尋ねもとむるに、伊勢物語大和物語には限らで、古今集新撰和歌古今六帖にも見るをうべけれども、作者の名はさらに知られず。古今集雜下に讀み人知らずとて入りたるこの歌にいとも長き詞書そひたれど、その述ぶること伊勢物語草子地にさしも距へだたらず。ここに古今集のこの詞書と伊勢物語草子地との成り立ち、いづれ先にていづれ後れたりや、せちに知らまほしきはさることなれども、このことにつきて今の世の物識り人どもの推しはかり論あげつらへるさまげにさまざまなればいづれ當れりやとみには明あやめがたきぞわりなき。

伊勢物語の昔男、色好みの名に立てるかの中將在原業平朝臣にほかならねど、この物語の中に兄行平の名をあぐる一段こそはあれ、弟業平の名の見ゆるところ一つだになし。この伊勢物語の歌と草子地とすべて初めより在五中将にゆかりありたりと思ひ定めむはいとも危ふかるべし。今二十三段につきて云はむに、これもと大和葛城に生ひ育ちたるあやしの民の子の戀の物語にほかなかりしが、さりぬべきゆゑよしもやありけむ、いつしか在五中将の内にまぎれ入りぬと考へなばさしも誤りなかるらむかし。

井筒の歌の草子地の初めに、この男と女の親の田舎わたらひしけるを云へるに心とめではあるべからず。田舎わたらひをなりはひとなせるものと云へるうへは、かの源氏物語の夕顔の家に隣せるしづのをたぐひにもさまで異らざりしなるべし。光源氏一夜夕顔を五條わたりのかくれ家に訪ひしつとめて、隣の家にあやしきしづのをの聲々の聞えけるが、そが中に、ことしこそなりはひにもたのむところ少く、田舎のかよひも思ひかけねばいと心ぼそけれなど云ふものもありたり。かかるしづのをのたぐひ、平城なからの帝の孫王なりしあて人業平朝臣とはいささかのちなみありとも思はれず。御父阿保親王の田舎わたらひをなりはひとしたまひけむことゆめあるまじきなり。

さはいへど知顯抄宵聞抄など中ごろの註釋どもに、伊勢二十三段を業平によせて解きなせるものなきにあらず。さらに世阿彌元清の作れるなる井筒てふ申樂能あり。曲中仕手となれるは紀有常きのありつねの娘の亡靈にて、井筒の歌と白波の立田山の歌のゆゑよしを語り、はては夫たりし業平なほしの直衣なほしをまとひて舞ふと見えながら夜明けとともに消え失せぬるそのはての餘情よせいぞただならぬ。

大和物語に載れる白波の立田山の歌の草子地、伊勢物語に説けるとさまで異らぬこと先に述べたり。ここにては親なるものの田舎わたらひせしことはつゆ云はず、かへりて末に、この男は王おほきみなりてふ短き一言もてとぢめたるに心づかではおそかるべし。

伊勢物語にあまた入りぬる昔男の歌、半ばあまりはまこと業平朝臣の詠めりしに疑ひなければ、それらにまぎれて二十三段の兩首、はじめこそはあやししのしづの男しづの女の詠めりしものなりけれども、いつしかほかの歌どもとのわかちしるけからずなりゆくにつけて、この兩首をも業平にことよせて解くものさへいつしか出できたりしなるべし。

伊勢物語の中に業平てふ名は見えず。作者の昔男を述ぶるにも、ことさらおぼめかしかたみ翁とてあやしきしづのをに云ひなせることまれにしもあらず、かかる作者の書きざまにも心つきて王孫なる業平を田舎わたらひするものの子にわざと言ひ落さむことなきにしもあらざりけらしと思ひめぐらしつつ二十三段を業平によせて釋くものやうやく多くなりゆくはえさらぬいきほひと云ひつべくしてさしもあやしむにたらず。かく白波の立田山の歌を業平と有常女によせて釋くことのやうやく習ひとなりゆけるころほひに大和物語の草子地出できたりと思はむはあながちしひごとにてあらず。

二、

盗人を白波といふこと古く漢土に始まりぬれど、この習ひいつしか本朝にも傳はりて、伊勢物語にて沖つ白波立田山と詠める句の白波を盗人こころの意にとること例少たむからず。源經信の著せるなる知顯抄にては、この白波といふはまことの波にてはあらで盗人を白波とい

ふなりと説きたり。大和河内の境なる立田山に盗人のふせりて旅人をねらふことまさしくありたりしやいなや、今知らむにたよりなければいとおぼつかなし。また顯註密勘にて顯昭法師、この歌の白波を盗人の意にとるものあれどもみづからはさ思はざる由、またこのことにつきては定家卿、顯昭に同意せられしこと、山口抄尙聞抄など披き見ば定かに知るをうべし。

ここにて顯昭、伊勢二十三段の白波の立田山の歌に比むがために、萬葉集卷一に入れる

海の底奥おきつ白波立田山

何時か超えなむ妹があたり見む

といへる一首に説き及びたり。この歌にて立田山の五文字の上に奥つ白波の七文字を加へたるは、立つといふ語を導かむためばかりにて、立田山に盗人が立つの意はさらになし。伊勢物語の歌の白波もただ立つといふことばかり云はむために上に白波の語をすゑたるなれば、大和の女の歌の詠みざまこの萬葉の歌の調べにあひかよひて聞ゆ。かく顯昭の示せる一首の解きやういともなだらかにて、この白波をことさら盗人にかけてむはかへりて手筒なればえうなきわざと云ひつべし。されば伊勢二十三段にて女の詠める歌に夫の盗人に襲はれむを危ぶみ憂ふる心さらになきなり。

そはともかくもあれ、盗人を白波と云ふことのゆゑよしここに一わたり尋ねみではあるべからず。

東漢の末、世の亂れゆくにまかせて、群賊蜂起せるさま、范曄はんえふの後漢書によりてぞ知らるるなる。孝靈帝の中平元年二月、鉅鹿きよろくの人張角みづから黃天を稱いひて冀端きんたんを開けり。この時の叛徒三十六萬に及べれどもみな頭かしらに黃巾を結びたり。これすなはち黃巾賊なれども、朱儁しゆしゆん皇甫嵩ほふすう、官軍を率て、ここかしこにてもよく賊徒平定に勤めしうちに、張角は死にその弟張寶は斬られぬれば、同じ年の十月にはさしもの大亂おほかたは平ぎたりしがごとし。さはれ黃巾賊つひもたたく潰えたりしにてもあらず、餘黨あまがたさまさまありて、ここかしこ

にて民人に患害を加へしこと少からざりしにいたり。白波賊と云へるはかかる餘黨のたぐひにほかならず。中平五年三月、黄巾の餘賊郭太等、西河白波谷に起り、大原河東あたに寇あし、同じ年の九月、匈奴南單于叛きて白波賊と河東に攻め入りしこと靈帝紀に記せり。

そも漢土の群賊さまさまありし中にて、白波賊といへるは數にも入らぬ小賊にすぎずとはさすが云ふまじけれども、さはれさまできはだちたる大賊なりきとも思ほえず。しかるにわが國にて中ごろより白波てふ名もて盗人山立ちを指すことまれにしもあらぬはなにゆゑならむ、いぶかしきかたなきにあらざ。

ここに白波といふは水波にてはあらず、もと賊徒の籠もれりしところの名にて、白坡と記すことさへあれども、かかる所の名、白き水の波の意いひにかよひて聞えりとせば、歌枕のごとくにもなりてみやびたるおもむきそひたれば、假名文の中に用ふるにふさはでもあるまじきなり。

白波賊に先立ち、かの王莽しばらく漢の社稷を奪へりしころ、綠林山に籠もれりし賊徒あり。これにちなみてわが國にても盜賊を綠林と呼ぶことなきにあらず。近き世の戲場の台詞せりふに、夢さら知らぬ白波の綠の林めの小倅などといへるあり。古き世の大和歌にこの綠林を詠みし例ためしはたありやいなや定かならず。たえてなしとは思ひがたけれども、もしありたりとも白波に比ぶればまれなるべし。盜賊を指して綠の林と云はむは、白波と云はむにもなかなかまさりてみやびて聞ゆめれども、四文字なる白波に代へて七文字なる綠の林をさながら三十一字の内になだらかに讀みこまむことたやすきわざにてはあらじかし。

大和の女の夫を思ひやりて歌に詠める立田山の白波、盗人たうじんの意にはえとるまじきことすでに敍べりしがごとし。ことに名に立てるこの白波を盗人にかけて解くことそもいつのころよりの習ひならむ、しかと定むべきたよりとはあるまじけれども、ここになほざりにすまじきは拾遺集に入れる藤原爲頼の歌にて、これ一たびけみせではあるべからず。

盗人の立田の山に入りにけり

同じかざしの名にやけがれん

この爲頼の一首に白波の五文字ばかりこそなければ、立田山を盗人の隠ろへるところに云ひなせるにまぎれなし。立田山に入りぬればわれもあやなく盗人の名を負ひもぞすると云ふが下の句の意なり。廣義公頼忠の家の紙繪によせてこの歌詠めりしとき、爲頼の伊勢物語の白波の立田山の一首をさながら本歌とせりところはずが云ひがたけれ、そを思ひかけざりけむことえしもあるまじければ、ここにて爲頼、大和の女の歌に見ゆる白波の一語はや盗人にかけて釋きしことをささ疑ふべからず。かく伊勢二十三段の歌の白波を盗人の意に云ひなすことのやうやう習ひとなりゆきしは、長徳四年にみまかりし爲頼の世にありけむ圓融院花山院一條院の御宇にてもやあるらむ。かく論へるはわがかりそめのおしあてごとにすぎず、よりどころ確かならねばいともおぼつかなし。さはれ大和歌の中に盗人の意にて白波を讀み入るる習ひ、古く六歌仙の世にありしころに遡るとも、はた今見る伊勢物語の本文の定まりゆくころほひに生まれりともなかなかえ考ふまじきにこそ。

(令和四年五月二十五日受附)